

火曜日で午後も外来診察担当の日。患者がとぎれた時、診察室の机の上で自分の眼鏡を壊してしまった。

所在ない時の癖で無意識のうちに眼鏡を外して、掛け具合を矯正しようとして指に力を入れていたらしい。頼りない衝撃にはっとして初めて自分が何をしていたのかに気が付く。しまったと思う。

二つのレンズをつなぐ橋のところが折れてしまった。耳に掛けるツルが折れたのと違って、鼻に乗せるところが切れてみるとそれはもう眼鏡ではなくて、不意に見慣れない知恵の輪のようなものになってしまった。

このところ急速に進行した老眼のせいで、近視用の眼鏡をかけたままだと細かい文字が読めないのです、ついかけたり外したりが頻繁になっていた。それだからどうしてもツルが開き加減になる。その緩んだ感触が嫌いで、ともすれば外してツルを撓めるのが癖になっていた。

眼鏡をかけた方がよく見えると初めて気が付いたの中学一年生の時である。六三三制の中学は発足したばかりで私達は第三期生だった。自前の校舎もまだ無くて小学校に間借りしていた。小学校の最上級生の時は明るい三階の教室だったのに、また一年坊主になって一階の日当たりの悪い中庭に面した暗い教室に移った。窓際の席からさえ空を見ようとすると硝子窓を開けて首を突き出して仰がなければならない。雨降りの時には本当に電灯が必要だった。

教室が暗いせいばかりではなかっただろうけれど、後年眼鏡をかけた顔しか思い出せなくなつた友達の誰れ彼れは、みんなこの頃からかけ始めたような気がする。私も兄の眼鏡をこっそりかけてみて、遠景が一寸小さくなるけれど、すこぶるはつきり見えるのに驚き入つたのがこの頃だったと思う。二年生の頃にはもう自分の眼鏡を持っていた。その年排球部に誘われて、トスポールを揚げる練習中に、ジャンプした拍子に眼鏡の方が先に落ちて、あとからもろにその上に着地して嫌な感触と共に運動靴で踏みにじつた覚えがある。余程高く跳びあがっていたのだろうか。

鳥取の大山で痩せ尾根から転落した時には顔を岩に叩きつけて眼鏡を粉々にしてしまい、顔全体の脹れもあって殆ど何も見えない有様になって、這うようにして岡山まで還つたことがある。伯耆大山の駅までは堰堤工事のトラックの荷台に風呂敷包みのように積んで貰い、岡山までの伯備線は郵便小荷物車の床に転がされての生還ではあったが、骨折してい

た左胸が酷く痛く、呻きながら磨り減った板張りの床を見つめているばかりの、長い反省の旅だった。

若い頃の眼鏡破壊は運動中が主だったが、今度は老眼絡みである。これを契機に二重焦点のやつにでもすべきなのかも知れないが、突然の不祥事で決心がつかない。看護婦のM君が大変々々と言いながら事務室から借りてきてくれた瞬間接着剤でとりあえず付けて見る。瞬間とはいうものの固まるのに二十分はかかる様だ。そうつと取り上げて鼻に乗せてみたら微かに歪んで、いまにも剥がれそうである。五時までなんとか保たせてこのまま駅前通りの眼鏡屋に行くしかない。とりあえず老眼は無視してこのレンズをそのまま新しいフレームに嵌めこむだけにするつもりだ。

(五時通信 第二二号 一九八五年十月十日)